

『正法眼蔵』成立の諸問題(四)

— 60巻本『正法眼蔵』を遶つて(1) —

河 村 孝 道

(一) 永平『正法眼蔵』には種々の編輯本が存在している。『正法眼蔵』は95巻の編成⁽¹⁾というのが通説であつたが、古写本類の発見・紹介等に伴つて『正法眼蔵』の編集謄写の歴史も次第に解明され、現今では書誌学的・成立史的研究の上から一応75巻本及び12巻本正法眼蔵をもつて道元禪師の親編⁽²⁾編輯⁽³⁾成本として定説化⁽⁴⁾しつつある。尤も、その75巻本の編成は孤雲懷辨であるという、曾て曹洞宗門中古時代に於いて論じられた懷辨編集説を再唱している説もある。私自身は、12巻本の存在については尚研究の余地を残し、且つ75巻本も本文の批判的研究(証本の定本化)という検討の余地を残しつつも、併しながら75巻・12巻本の道元禪師親輯説を肯うに吝ではない。併し尚、その成立・編成については未解明の問題が多く残されている。其等の内の一つとして是処で取り上げた問題は、75巻・12巻本と共に宗門上古時代に編集々成されたとする60巻本の存在に就いてである。是処には此の60巻本

の存在を中心として、その思想的內容面からの考察は暫く措いて、書誌学的・成立史の見地よりその編集の位置づけを問題とし、75巻・12巻本と60巻本との未解明の両本の關係について一つの可能な視点を提起してみたい。勿論、あくまでも問題提起であつて問題解決への原資料を欠く現在に在つては、その解決に當つては能う限りの可能な問題を提起し、それを吟味して求心的に事の真相を明かしてゆく外ない。本論は斯様な流動的見地に立つ所論である事を予め断つておきたい。

(二) 従来、60巻本は、第一次編輯の75巻本中の五十巻を主要軸として永平義雲に依り新たに60巻に編成されたものであるというのがその通説となつている。そしてその編成の緣由に就いては、①回祿拮捨説、②官本説、③意図的編成説、の大要三通りの説がなされている。先ず①に就いては、回祿が歴史的事実ではない事、また義雲自身は弘安二年(一二七

九)二十四歳頃より『正法眼蔵』の書写に着手しているという事実⁽⁹⁾に徴すれば、宝慶寺より永平寺在任中に至るまでには相当数の書写を成し得ていたこと等より考へる時、灰燼中より60巻を拮拾し編成したと考へる事は、容易には肯い難い。

②に就いては、義雲が永平寺在任中に朝廷より『正法眼蔵』奉皇の勅命に依つて、75巻中より他宗を誹謗する巻を省いて60巻に編成し呈上したとする説である。是れに就いては、「泉福寺塔頭普門院常住」の60巻本を寛延三年(一七五〇)に書写した古写本一本には、各冊毎に「官本六十巻」の識語の存する事実よりして、官本説は無碍には否定出来ない説で、今後に検討すべき問題を残している。尤も、60巻本の原本に最も近いとされる洞雲寺蔵・金岡本⁽¹⁰⁾及び60巻本系の諸種古写本中には「官本」の記事はない。また官本説の出拠と見られる面山瑞方の『正法眼蔵現成公案聞解』の註記では、60巻撰集の理由を救命に依るものと言うに對して、同じく方偃は其著『正法眼蔵諫蠹録下』第十二葛藤補闕録には京師の官家より請われたものとして、その緣由に統一性を闕いている。仮りに官本説を認めたとしても、既に道元禪師自身に依り編輯体系化せられてある『正法眼蔵』を、例え勅命にしろ、官家の請にしろ、義雲自らが自己の恣意を以つて取捨し別体系の『正法眼蔵』を編成するなどと言う事があり得るであらうか。『義雲語録』を通して窺われる義雲の人柄⁽¹¹⁾からし

ても其様な事は到底肯い得ない。また、世間へ憚る所あるものを省いて60巻を撰集したという理由に就いてみても、例えば第四十六・無情説法、第四十七・見仏等のように臨濟・徳山・雲門への誹謗の箇処の削除されざる巻もある。とすれば、60巻官本説の根拠は些か薄弱とならざるを得ない。③については、60巻の巻目数字は道元禪師が75巻の体系を為すに當つて巻目数字の組替えを行なつた所より成立せるもので、道元禪師在世當時よりあつたもので、義雲はその巻目数字に従つて60巻をまとめ、その際、師の寂円に伝わる『法華転法華』『四摂法』『掃依三宝』等の巻目を加えて編成したとする意図的編集説である。是れは一面妥当性を有つ半面、是処でもまた素朴な疑問として、何故に道元禪師の意図的体系的編集本を無視してまで別に60巻を編成しなければならなかつたのか、と問わざるを得ない。此外に当時の社会的情勢に原因をもとめて、永興寺・大乘寺・永光寺等に『正法眼蔵』75帖本等を照会拮拾することの不可能な事情より60巻の拮拾集成となつたとする説⁽¹²⁾、或は寂円の道元禪師下に於ける位置及びその思想的背景より寂円乃至その嗣子義雲に由来するものとして60巻本編成の思想的特異性を見んとする説⁽¹³⁾、更には75巻本と60巻本との巻目列次及び内容の比較対照より前者を出家道的説示、後者を在家的説示と見る説等、種々の推論がなされている。是等の説はそれぞれに充分な吟味を経てその真

偽が明かされなければならぬが、その際に心しておかねばならないと思われることは、寂円は道元禪師を慕つて来朝し、道元禪師の入寂までその膝下にあつて師事し、寂後は懷辨に嗣法して後に弘長元年（一二六一）永平寺を去つて宝慶寺

に入るまで約三十五年間、道元・懷辨下にあつた事、従つて例え語学的なハンディがあつたとしても当然道元禪師に依る75巻本、12巻本の親轄体系化の作業及び其等の存在を知らぬ筈はない。道元禪師自身に於いては、既に真字『正法眼藏』（三百則）に見られる如く、早くより『正法眼藏』撰述の意図はあつた。更にまた、道元禪師在世時及び寂後の原始僧団に於いて、果して後に臆測する如き寂円・懷辨・詮慧・義价等の思想的対立がありえたであらうか。各々の人物に於ける性格的な事は暫く措いて、道元禪師を中心とする宗教——「正伝の仏法」に於ける思想・信仰の受用という面に於いて、それぞれの上足間に於いて正・異の葛藤がありえたか否かは充分に冷静且つ客観的な研究を俟たねばならない。「寂円・義雲を中心とする宝慶寺系は、懷辨・義演を中心とする永平寺系とは別箇に六十巻をもつて『眼藏』の大宗とし、寂円派の宗乘的位置を確立して、義介系の道元門下に臨んだ」とされる対派的なものとして論じられる60巻本正法眼藏の宗旨とは一体何であるのか。それが若しも前掲の説の如き75巻本に対して对在家的示衆傾向を有つものとするならば、寂円

の宗風よりして到底背い得ないであらう。確かに60巻本正法眼藏は寂円・義雲系に伝わつたものではあるが、果してそれは寂円または義雲に依る意図的編成なのであらうか。それともその編成は更に遡るものなのであらうか。

(三) 60巻本の存在に対して、これまでに伝承されている成立編輯の論議・視点を離れて改めて眺めてみる時、従来安易に看過している全く基本的な事柄に気づかされる。例えば60巻本が義雲の編成であるという伝承にしても、併し乍ら上述の如く義雲は寂円に随侍して若くして『正法眼藏』の書写に着手しているが、その書写の巻目は後の撰述である「正法眼藏品目頌」と共にいずれも60巻本の巻目であることからして、60巻本が義雲已前の編成である事に容易に想到し得る。然も、寂円にしろ懷辨にしろ道元禪師の撰述の逐一、及びその体系的編成を身近に侍して知悉していたであらう事からすれば、彼等が自からの恣意で以つて別編成するということだけは到底考えられない。とすれば、その編成者は結局道元禪師の手裡にまで遡源し帰着する事となる。

抑々義雲60巻本編集説の論拠は『義雲録』下巻の、嘉曆四年（一二三九・元徳元年）に撰述した「永平正法眼藏品目頌並序」の一篇に由来している。その品目列次を直ちに頌・序と共に義雲の撰述と速断した所に発した説と思われる。それが速断である事は、既述の如く義雲が寂円に参随して60巻本の

『正法眼藏』を書写している事、そしてその「品目頌」の「序」を仔細に檢すれば必ずと明らかであろう。即ちその「序」には

正法眼藏 密伝密附 古之与今 嫡仏嫡祖 永平元祖入宋 穿
 鑿五葉之根蒂 掃朝 能為一天之陰涼 戒斂婆心 以和字柔
 漢語 一 奇妙善巧 令人不累文言 如石含玉 似地擎山
 聊綴卑語 述其大旨 耳 後昆此八字不打開 妙心源未通
 徹 一大藏教 少林妙訣 夢也未見在矣。

嘉曆四年仲夏 會孫永平老衲義雲謹序

とある。永平元祖に依つて和字を以つて示された正法眼藏に、その各品目にいま自分は「綴卑語」頌を付して「述其大旨」べて是れに序を付した、というのが序の真意である。是処には何処にも品目列次番号の編成を為した事は述べてなく、むしろ文意は既に存在する和字正法眼藏——それは明らかに60卷正法眼藏を指標する——の各品目の大旨を述べたという事を謙虚に序しているのである。更に幾つかの例証を挙げて見よう。

① 十二卷本正法眼藏『八大人覺』卷の懐辨の識語——「師以前所撰假名正法眼藏等皆書改并新草具都盧一百卷可撰之云々」の語は、通常は新草12卷本に対して旧草75卷本を指すものと解されているが、是れを60卷本の名目(75卷本中共通卷目五十卷、同じ列次番号よりなるもの三十二種)までをも含めて、一百卷撰述の意図を有つて「書改メ」の修

訂が行なわれ、75卷・12卷正法眼藏へと改めて体系組織されていつた事を物語る識語として見得ないであろうか。75卷・12卷本と60卷本とその本文の比較考察を通してみる時、60卷本は前半が第一義諦的示衆面、後半が第二義諦的示衆面(勝義諦的宗教理念の極相の開示のみではなく、是れを實踐的に乃至は對機的に敷衍化したものという意味に於いての謂である)との混在の性格をもつ巻目数より編成されているのに対し、75卷・12卷本は75卷本が第一義諦的立場よりの根本宗旨の示衆品目より編成され、然して12卷本は所謂60卷本の後半の第二義諦的巻目が分離されてそれが編成されているやに見得る。つまり、75卷本は多分に60卷本の混在性を整理して第一義諦的「正伝の仏法」の理念の体系組織化であり、12卷本はその具体的実践態、乃至は第二義諦的應機的説示の組織化の性格に立つものと見られるであろう。若しも是れを逆に75卷・12卷本とを改めて60卷として合様編成したものとすれば、親輶本を無視してまでも果して何人が何の目的で再編成なぞ為し得るであろうか。道元禪師が75卷を体系組織するに際して組替えをして省いた諸卷を後に義雲はその数字に随つて編集し、是れに、寂円に伝わる『法華転法華』『四摂法』を合して60卷を集成したとする説にしても、それならば75巻と同巻目・同列次のものが五十巻乃至は三十二種も存するのは何故であるのか。仮りに集成し得たとしても、師の寂円からも道元禪

師の親輯本の存在乃至は親輯作業の事を聞いて知らぬ筈はないであろう。私は、75巻本が永興寺詮慧・経家に伝来したと同様に寂円にも勿論書写伝来されたものと思う。にも不拘60巻本が義雲に依り書写伝来したという事は、正に其事にこそ却つて60巻本は、道元禅師の手裏に於いて最初に『正法眼蔵』の撰述とその編成化が意図されて未輯成の儘に漸がて75巻・12巻本へと種々なる組替えの上に編成体系化されて行つたその前段階的未輯成本とも言うべき性格としてあり、寂円は道元禅師の最初の『正法眼蔵』として是を珍重し護持していたものと見得ないであろうか。寂円乃至はその室中に伝わる60巻本は、正にその和字『正法眼蔵』としての原初態（内容的にも成立史的にも）とも言われるべき、それなるが故に寂円により護持伝来されたものとは言い得ないであろうか。

然もまた、75巻に漏れた諸巻が新たに12巻本へと編成されていつている事実からして、それでも猶敢て60巻を集成する動機が果して存するであろうか。然して新草12巻正法眼蔵は完結した編集ではなく、業半ばにして止むを得ず筆を折られたものである。懷辨の言を借りれば、種々の修訂が施される可きものであるにも不拘未だ中書・清書等に及ばざるものも多分に存するのであり、所謂75巻・12巻親輯本中に『法華転法華』『四摂法』が編入されていないとしても何等不思議ではあるまい。道元禅師御存命ならば、当然に其等の諸巻は修訂吟

味を経て12巻本に続くものとして輯録編成せられるものと考えられるからである。② 豊橋・全久院所蔵の懷辨自筆書写本「正法眼蔵第四十五 十方」は60巻本の編集列次に順ずるが、前題・後題列次番号の「第四十五」の「四」の字は明らかに書改めた字である。75巻本「第五十五 十方」の番号であつたかも知れない。そしてその書改めも懷辨自身による書改めと思われなくもない事からして、或は60巻本・75巻本編成時の種々なる組替えの行なわれた事を証する番号の事例を示すものと思われる。③ 大分県・広福寺所蔵の道元禅師自筆草稿本『行持下』巻には、諸処に亘つて本文の修訂書入れが施されている。是れを60巻本の「第十六 行持下」と75巻本の「第十六 行持下」と比対較照してみると、60巻本『行持』巻は修訂書入れのない初稿本であるのに対し、75巻本『行持』巻は書入れ部分を完備した修訂再治本を底本として

いる事が知られる。この現象は単に『行持』巻だけにとどまるものでなく、他の巻々にも見られる。とすれば、60巻本正法眼蔵の本文は多く道元禅師の初稿本を伝えているのに対して、75巻本正法眼蔵の本文は多く修訂再治本に依つて編成されている事に気づかされると共に、是処に於いて、60巻本が『正法眼蔵』編輯の第一的性格を多分に有するものである事を知らされる。④ 更に注意を要する資料としては、『正法眼蔵』最初の註解書である『正法眼蔵抄』（通称、御抄）を

挙げる事が出来る。『御抄』は周知の如く詮慧の『聴書』を基

にして其嗣・経豪が乾元二年(一三〇三)より延慶元年(一三〇八・道元禪師滅後五十六年)に亘つて註釈したもので——『聴書』は弘長三年(一二六三)、道元禪師滅後十一年に成立——

其処には『正法眼藏』の思想論・成立論等に関する貴重な問題が内包されている。『御抄』に就いてはその成立事情及び

伝承史、現泉福寺所蔵本の経豪自筆の真偽等々種々の考究すべき重要な問題が存するが、是等に就いては検討中であつて

発表の段階ではないので後日に譲り、今は暫く従来の『御抄』に対する通説に則つて問題点を指摘するに止めたい。経

豪自筆本とされる泉福寺本『御抄』は、その本文は修訂再治の75巻本を底本としているものであるが、その各巻の品目題

下には数箇処に亘つて60巻本の巻目及び編輯番号と比較した識語がある。刊本『御抄』(鴻盟社版・曹洞宗全書版・正法眼藏

註解全書版)には全く顧みられなかつた記事である。書体、墨色等は本文・紙質と共に経豪自筆本の真偽と相俟つて、60

巻本の第一次の親輯本(たとえ未完成とはいへ)か否かの決め手となる記事だけに厳密なる書誌学的検討を要する。泉福

寺蔵『御抄』に見える60巻本との比較記事を列挙してみよう。

①「伝衣第三十二」三十二ハ三界唯心ナリ
異本正法眼藏ニテハ四十一トアリ袈裟功德トアリ。

②「三界唯心第四十一」正法眼藏ニテハ三十二ナリ。

③「遍参第五十七」本卷ハ三十七トアリ
五十七ハ安居ノ卷ナリ。尚、題目右注に「是ニ春秋ノ卷ヲ添ユ」の

「見せ消チ」の文がある。④「発菩提心第六十三」正法眼藏

ニテハ第三十四ナリ等の記事がそれである。是事は75巻本の成立当時、或はそれ以前に60巻本の存在した事が窺われる。尚、是等の記事の外に「阿羅漢第三十六」余本談之、「洗

面第五十」讀余本ナリ、「面授第五十一」用余本、「洗淨第五十四

面第五十」讀余本ナリ、「優曇華第六十四」讀正本、「転法輪第六十七」讀正

本」等の註記が見える。註釈に当つて経豪(又は詮慧)が

「余本」(未再治本或は再治修訂本・懷非清書本、又は60巻本等を指す)を併せ参照依用した事を示す註記であろう。上掲の

①に就いては、「三十二ハ三界唯心」とは60巻本に於ける「第三十二」の品目を示し、「異本正法眼藏……四十一……袈裟

功德」とは「伝衣」に相当する品目が60巻本では「袈裟功德」であり、それが第「四十一」に位次する事を示す。⑤

「三界唯心」の品目は60巻本では第「三十二」に位次する事を示す。⑥「遍参」の巻目は60巻本では第「三十七」に位し、

「第五十七」の列次番号に相当する巻目は60巻本では「安居ノ巻」である事を示す。尚、この註記に更に註したものと

思われる「三十七ト可書、是ニ春秋ノ卷ヲ添ユ」の記事は、60巻本に於いて「遍参」は「三十七」である所から其事を書記すべき事を示し、その第三十七が75巻本に於いては「春秋ノ巻」に当る事を註記したものである。⑦「発菩提心」の

巻目は60巻本では「第三十四」に当る事の註記である。いすれにしても、右の諸註の示す処は60巻本との対照及びその未体系的編成の消息を物語つていふと言えよう。⑤ 75巻本との比較に於いて、兩本共通の巻目は五十巻で、此の中、編集番号を同じくするものは60巻本中三十二種に上る。是事は、75巻本編成に当り60巻本がその基礎資料として用いられた事を物語つてゐる。⑥ 『現成公案』巻は75巻本では奥書に「建長壬子捨勒」の識語が存するが、60巻本『現成公案』巻にはこの識語はない。是は明らかに75巻本編成の時に改めて「捨勒」編入された事を示す記事と言へる。⑦ 60巻本中、75巻本に無い全く別種の『正法眼蔵』は「三時業・法華転法華・菩提薩埵四摂法・四馬・発菩提心・袈裟功德・出家功德・供養諸仏・帰依三宝」の九巻であるが、是等の諸巻は漸がて新草12巻本として改めて体系編成化されていつたもので、60巻本との深い関係を示している。——以上、是等の所論は、60巻・75巻・12巻本の思想内容の究明と相俟つて、成立史的・書誌学的研究の援用に於いて充分に検討されねばならない。が、それは後日に譲り、今は暫く外面的資料を其記事の表意する所に従つて、60巻本の存在及びその位置を概観するに止める。——註記省略——(未完)

寄稿されなかつた諸氏の発表題目(一)

珍海の「決定往生集」について	明山 安雄
大海人皇子の吉野へ出家について	朝枝 善照
主として諸經典の性格(形式)と思想 (阿含経)其の一	朝西 芳見
三句思想の二面性	東 武
芭蕉と正法眼蔵随聞記	鏡本 光信
ハリバドラにおける <i>aisarya</i> の概念について	天野 宏英
薬師十二神将について	新井 慧譽
魏晋思想と仏教受容	荒牧 興俊
五代における仏教と庶民との接点	安藤 智信
近代的思惟と仏教革新論の変遷	池田 英俊
延暦寺別当創設	池山 一切円
権と実—中世宗教史の一視点—	池見 澄隆
宏智禪師と道元禪師—本証妙修思想の展開—	石附 勝龍
シャーンタラクシタの唯識批判	一郷 正道
Indo-Iranian sigmatic future (2) (3)	伊藤 義教

(二三〇頁以下)